富山発夢未来　～日々新たな気持ちで挑み、学びを楽しむ～

未来志創

2023(令和5)年
4/24 月
通心004(第737号)

教員６年目、中学３年生の担任をしていました。この学年は１年生の時から持ち上がった学年で、思い入れも強かったです。ただその前年、当時中学２年生の担任として新年度を迎えた矢先、トラブルが発生しました。クラス替えがきっかけで複数の生徒が人間関係に躓き、保護者の方にも何度も学校に足を運んでいただく事態になりました。毎日放課後はこの問題をいかに解決するか頭を悩ませました。トラブルを抱えた複数の生徒は学級にも入れなくなり、日々空き時間はその生徒たちのところに行き、ずっと話していました。その姿を見ていた他の男子生徒は「アイツらが教室に入らなくていいんだったら、俺たちも入らなくていいよね」と、連鎖が起こる始末…。ようやく、このトラブルがひと段落したのは市選手権大会の前夜、日付が変わろうとしていた時でした。ただ、その後も生徒同士はうまくいかず、自分の無力さを感じた一年でした。中学３年時、その中の一人の生徒の担任になりました。頭の回転がとても早く、学力も非常に高かったのですが、遠くから通っていたこともあり、遅刻や欠席も多かったです。当時の私は、その生徒とどう関わっていけばよいのかわからず、その生徒が何を考えているのかも分からないままでした。結局、うまくクラスになじませてあげることもできず、高校受験もうまくいかず…。担任として何もできなかったという申し訳なさだけが残る１年でした。

卒業後もいろいろとドラマはあるのですが、つい先日、その生徒に自分の退職の経緯を報告しました。時間が経ってしまいましたが、この生徒には伝えなければ…とふと思ったのです。すると、数日後に返信が来ました。

> お久しぶりです。私はとても元気です^_^　わざわざご報告ありがとうございます。　～中略～
> 今だから言えることなのですが、私は３年生に進級する前から学校外で色々トラブルがあり、精神的に結構キツイ状態でした。学校も行けるか分かりませんでした。沢山休んじゃったり、定時に来れなかったりとしましたが、それでも通えたのは先生のクラスになれたからだと心から思っていて、本当に感謝しています。親身に向き合ってくれたり、HRや授業中で素敵な話を沢山してくれたりと、言い切れませんが先生に沢山救われましたし、卒業してからも先生の言葉をよく思い出します。　～中略～
> 今私は先生の影響もあってか、教職に興味があり、いつか先生のような素敵な教員になれたらいいなと思っています。そう思えたのは先生が先生でいてくれて、出会えたからです。…

私自身、当時は毎日必死でしたが、心のどこかで、この生徒はちょっと苦手だな…と避けていた部分が正直ありました。ただこれを読んで、そんな自分が恥ずかしくなりました。私はこの生徒のことを何もわかってあげられていなかったんです。

以前、とある新聞社の編集長の講演会でこんなことを言われました。「いろいろな仕事が世の中にはありますが、こんなにも答え合わせができるまで時間がかかるのが教師という仕事ですよね。自分がやったことが正解なのかどうかが分かるのは数年後、数十年後のことだから、こんなに難しい仕事はない。そして、正解だったとしても、それを返してくれる生徒はほんの数人ですよね。」と。

信じることは私たちが生きる根幹なのかもしれません

相手の立場や状況、心情をよくよく考えて、できる限りのことを尽くしているのに、相手は分かってくれない。こちらの気持ちに応えてくれているように見えない。そういった感情が芽生えると、些細なことがきになります。衝突の火種が生まれます。

相手を信じることは、見返りを求めないことではないでしょうか。

人間は誰もが、優しい心を持っています。身近な人を大切にする心、道ばたの雑草さえ慈しむ心が、私たちのなかに確かにある。それは、神様からの授かりものです。

大切なのは、自分の心をどうやって磨いていくか。

「これだけ尽くしているのに、彼（彼女）は私の思いに気づいてくれない」と嘆くのではなく、「自分にはまだまだ、彼（彼女）のためにできることがある。相手の心に美しい花が咲くために、もっともっと自分ができることを探してみよう」と考えてみれば、信じる気持ちは揺らぎません。

優しく、丁寧に、真心をこめて人に接することができる。誰に対しても、思いやりの心で向き合える。道に落ちたゴミを拾う。みんなが使う椅子を綺麗に整える。公共施設の入り口で、靴が乱れていたら揃える――誰かがやってくれたら気持ちがいいことに、自分から取り組むようにもなるでしょう。

身近な人のためだけでなく、誰のためにも自分を捧げようという気持ちが広がっていけば、あなたの周りには助け合いの精神が育まれていくはずです。困難にぶつかっても互いに助け合って乗り越えていこう、という気持ちが広がっていく。

相手を信じないということは、自分の心を乱暴に扱うことと同じかもしれません。生まれながらに持っている優しい心を、両手で包み込むように育てたいものです。

『栗山ノート（栗山英樹／光文社）』より

大学生のころにある教授がいつも言っていました。「軸足は子ども」。その意味がようやく分かってきました。たとえ今は伝わっているかどうか分からなくても、子どもは大人をちゃんと見ています。そのことを今回また教わった気がします。そして、相手の言葉や行動には必ず意味があるということも。このようなことがあると、子どもたち以上に、自分自身が挑戦し成長し続けることが子どもたちと接するうえでの礼儀ではないかと思います。にしても、こんなにも人の人生に影響を与える志事って本当に素敵だと思います。